

「じゃあさ、モデルやってみない？」

それは、居酒屋で隣に座っていた男性に言われた言葉だ。

毎週のように一人酒しに行く居酒屋。

カウンターの隣の席で男性が食い入るようにスマホの画面を見ていた。

あまりに真剣そうだった。スワイプするわけでもなくただ画面を見ている。

気になってチラッと見てしまったら、画面に映っていたのは絵だ。

芸術に疎い私でも分かる、とても綺麗な色使いの絵。

「わあ、きれい……」

気付いたら口からそう漏れていて、男性はこちらに顔

を向けた。

「でしょう。これね、生徒の絵なんですよ。僕社会人向けの絵画教室やってて」

「先生なんですか？ すごいですね」

男性は少し歳上だろうか。

「先生」という肩書きが似合う、落ち着いた清潔そうな人だ。

彼は野上(のがみ)と名乗った。

彼の絵画教室は本当に近所で、通勤途中に名前を見たことがあるほどだ。

少しだけお互いのことを話し、またいくつか絵を見せてもらった。

「すごいなあ……。こういう、何か生み出せる人って羨ましい。私、なんにもないから」

本当に感心しきって私がぽつりと言うと、野上さんは私を見ながら微笑んだ。

「そう？ 意外とやったことないだけかもしれないよ」

「そうかなあ、……いや、確かにそうかあ。私も何か始めてみようかなあ」

「……じゃあさ、モデルやってみない？」

「モデル！？」

話を聞くと、彼の絵画教室でクロッキー会というものがあるらしい。

クロッキーとは短時間で対象を描く練習で、モデルは数分ごとにポーズを変えていくんだとか。

「新しい経験だと思ってさ。どうかな」

そう言われれば、職場と家を往復するだけの自分の生活へ刺激になる気がして。

私はその誘いを受けたのだった。

「……」

「あの椅子に座ってくれる？ ポーズは僕が言ったとおりにしてくれればいいから」

「……………」

「どうしたの？」

「いえ……」

(……まさか裸になるなんて思わなくて)

言葉の続きは心の中だけで呟いた。

昼間の明るい室内。

そう広くはないけれど、壁際にはぐると十人ほどの生徒さんたちが並んでいる。年齢はバラバラだけれど、みんな男性だ。

それぞれが様々なサイズのクロッキー帳と、芯の長い鉛筆を手にしている。

それから部屋の真ん中にはラグが敷いてあって、さらにその真ん中には木製の椅子。

私は裸でその椅子に座らなければならない。

抵抗感があるとはいえ、私はもう裸だ。

まだ大きめのブランケットで隠してはいるけれど脱ぐものは脱いだ。

だって今さら拒否できるわけがない。

みんな真面目にクロッキーをしに来ているわけで。こんな空気の中「恥ずかしいからやっぱり無しで」なんて言えない。

(むしろ恥ずかしがってたらイタイよね。やってやる

……！)

ブランケットを取って、椅子へ進んだ。

素肌を空気が撫でる。

心臓が大きく鳴って、勢いよく血を送り出しているのが分かる。

私が座ると野上さんが「じゃあまずは姿勢良く座ってもらおうかな」と言った。

私は学生時代の入学式や卒業式を思い出し、背筋をピンと伸ばす。

野上さんが部屋の隅のテーブルに立ててあったタブレットに指を伸ばした。

画面にはタイマーアプリ。

「じゃあ、始め」

野上さんが画面をタップし同時にそう声が言うと周りの生徒さんたちは一斉に鉛筆を鳴らし始めた。

あらゆる角度で裸を見られ、見たままを紙に描かれていく。

囲む男性陣は初老の男性からまだ大学生くらいの若い

子まで様々だ。

その誰もが私の体と手元を交互に見ながら描き進めている。

ピピピピピピ……。

しばらくしてタブレットから音がして、「じゃあ今度は足を組んで」と野上さんに言われ、私は足を組んだ。

十秒ほどのインターバルがあって、またタイマーが動く。

その繰り返し。

私は野上さんの指示通りに体を動かすだけだった。

顔の角度を変えたり腕を上げてみたり、何度かポーズを変えていった。

(恥ずかしがってたのがバカみたいだな。みんな真剣だ)

スマホを触ることもできずただモデルに徹する私。

部屋に響く、鉛筆が紙を滑る音が気持ちいいと思い始めた頃。

少し空気が変わった。

「——じゃあそのまま足を開いて」

上半身への指示が主だった野上さんの言葉が変わった。  
座ったまま足を開くって、つまりそういうことだ。  
一瞬躊躇したけれど私は少しだけ足を開いた。  
だけどそれも、次には。

「もう少し開いて」「さらに開いて」とポーズを変える  
たびに開かされる。

私の正面には若い男の子が座っていて、彼にはもう見  
えてしまっているだろう。  
私の足の間。性器が。

「夢子さん、もっと開ける？」

「は、はい……」

椅子の後ろ側に手をついて思いっきり足を広げた。

(は、恥ずかしすぎる……！)

この格好を見られ、描かれているのかと思うと平常心  
ではいけない。

体が熱くなっていく。

しかも意識しているせいで何度か陰唇もヒクつかせてしまった。

「……、……」

ただ私の輪郭を捉えるためだった生徒さんたちの視線。それが体にまとわりついているように感じてしまって。そんなの私の意識の問題なのに。

息が上がる。椅子の端を持った指に力がこもる。

腰まで少しずり落ちると、野上さんがこちらへ歩いてきた。

「少し疲れちゃったかな？ 手伝いましょうか」

私の背後に立った野上さんは、後ろから覆い被さるように体を倒すと私の内ももに手を添えて、さらに開かせるように私の足を外側へ押した。

「あ、あの…っ」

「ん？ 痛い？」

「いや、痛いとかではないですけど」

恥ずかしいのもそうだけれど、それより、野上さんの



腕が私の胸を挟むせいで乳首が腕に当たっている。

ただでさえ熱い体が熱くなって、そこに意識が向いてしまっていて……、勃ってしまう。

そこでタイマーが鳴った。

インターバルの時間が進み出し、野上さんの声が頭上からした。

「もう少し変化が欲しいね。ここ、触ってみようか」

足に置かれていた野上さんの指が。

開かれていた私の、おまんこを、撫でた。

「……っ！！」

驚いて飛び上がってしまった足。

野上さんは指でクリトリスをくるくると撫でながらとんでもないことを言い出す。

「いいね、足浮かせてて」

「ちょ、あの、これ、」

「ほら、時間始まるよ」

タイマーが始まった。

でも野上さんの指は止まらない。

くる、くる♡

「んあ、あっ」

包皮の上から優しく、

くる、くる♡

「っ、…ツ」

触れるか触れないかくらいの圧で、

くる♡ くる♡

「……ふ、ツう」

小さな粒を撫で回す。

クロッキーの時間は一分だ。

野上さんはひたすらに私のクリトリスを一定の圧と速さで撫で続けた。

くる♡ くる♡ くる♡ くる♡ くる♡

「あっ、あ、ふ♡ う、う……っ、ん♡」

皮の下でむくむくと育っていく……♡

パンと張って、野上さんの指の感触を逃すまいと過敏になっていく♡

くる♡ くる♡ くる♡ くる♡ くる♡

「あ、うあー……、ッ♡ んく♡ うっ♡ あ♡」

あらゆる方向から注がれ続ける視線の中、私は足を思  
いっきり開いて弄られ続けるそこを晒した♡

正面にいる男の子の手は今までよりも早く、視線は私  
の中心に釘付けだ♡

そこでタイマーが鳴った♡

野上さんはクリトリスから指を離すと、

「次はこっちも。脂肪が潰れる様子って描くの難しいか  
らね」

「うあ` っっ♡」

淡々とそう言って私の両胸を両手で包み、乳輪を指で  
挟んだ♡

摘み出された乳首にトクトクと血が巡る♡

あっという間に勃起していく♡

その手は乳首の付け根をこねるように上下に動いて、  
タイマーもまた始まった♡

こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡

「あ♡ あッ♡ あん♡ あっ、あっ♡」

足が閉じられず、両乳首への刺激に上半身が動けない  
代わりに腰が動く♡

こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡

「あッ、ああ♡ なんで、こんな…っ♡」

「人間って快感に浸っているときが一番美しいんだよね」

そこで野上さんは乳首を搾るように指で挟んだ♡

「…………っっっ！！♡♡♡♡」

ビリビリ、乳首から全身へ刺激が走って背中がしなる♡

「夢子さんも自分を解放してみるといいよ。我慢しないで、自分が一番幸せなほうへ、素直になって」

野上さんの片手がまた足の間へ戻ってきた♡

その指は親指と中指でクリトリスを挟むと、覗いた先端を人差し指で♡

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡



掻く♡♡♡♡

「ッう”ン” ……！♡♡♡♡♡」

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡

ほんの少し包皮から覗いた部分と、皮の上から♡

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡

下から上へ、上から下へ♡

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡

私の足がカクカクと小さく痙攣するのも構わず♡

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡

掻き続ける♡♡

「あッ♡ あっ、あっあっあ♡ だめ♡ 野上さん…ッ”♡  
あアアッ♡♡」

タイマーが鳴った気がする♡

でも私の耳には遠い♡♡

野上さんは腕で私の体を固定しつつ、乳首とクリトリスを弄り続ける♡♡

こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡  
「ん`ア`っ♡ ああ♡♡ あッ`♡♡ あ♡あ♡あ♡あ`  
ツツ♡♡」

こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡  
こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡  
乳首は伸ばすように搾られ、クリトリスはつるつるの  
表面と皮の上からを細かく往復する♡♡

こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡  
こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡  
「あ`……ッ♡♡ あ、だめ、だめです、……！♡♡♡  
……～～ッ`ッ`！♡♡♡」

こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ こり♡  
こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅっ♡♡  
観察する視線に囲まれて、体が昂っていく♡♡

(や、ばいい……、気持ちよくなっちゃってる、……て  
いうか、もうイっちゃう、お腹ぎゅってしたらイっちゃう  
う……！♡♡)

浮いたままカクつく足の先を握り込んで、私は下腹部  
に力をこめた♡♡

ぶわり、一気に体の端まで気持ちいい感覚が伝わり♡  
♡

野上さんの指が激しくなる♡♡♡♡

こりこりっ♡♡ くにくにくに♡♡ こりこりこりこり  
こりッ♡♡♡

こちゅこちゅこちゅこちゅッ！♡♡ こちゅこちゅ  
こちゅこちゅッ！♡♡

「あゝ……ッゝ あああ♡♡♡♡ イく、イク…！！♡♡  
♡♡♡」

「いいよ、みんなにイクところ見てもらおう」  
「……！！♡♡ ………ンゝ アあゝ あああッッッ！！  
♡♡♡♡♡♡♡♡」

ビクンビクンッ♡♡♡♡

椅子の上で体が震える♡♡

野上さんは私の頭を撫でながら、ヒクつくおまんこを  
周りに見せるように指で広げた♡

「ほら、素直になったおまんこは素晴らしいでしょう。  
本人の意思とは関係なくヒクついてまだ誘ってる」

とんでもなく恥ずかしいけれど野上さんの言う通りだ  
った♡

クリだけで絶頂を迎えたおまんこは自分でも分かるくらいにぬるつき、くぱくぱと閉じたり開いたりを繰り返している♡

「……ああ、後ろ側のみんなにはよく見えないか。夢子さん、椅子から立ちましょうか」

腕を引かれその場に立ち上がると、野上さんは私の片膝を持ち上げた♡♡

片足の不安定な格好でなんとか立っていると、クロッキーに勤しんでいたはずの何人かがすぐ近くまで歩み出てきた♡

「おお…」とか「すごいですね」とか言いながら覗き込んでくる顔は私からはよく見えない♡ けれどそれが余計に恥ずかしい♡♡♡

そのうちの一人、真面目そうな中年の男性が、

「もっとよく見てもいいですか？」

と言って私のクリ皮をめくった♡♡

ビクッと体が驚いたけれど野上さんにしっかりと抱き止められる♡♡



「ここもすごく美しいですね。ぷっくり腫れて、ツルツルしていて…。もっと気持ちよくしたらどうなっちゃうんでしょう？」

生徒さんの指が♡♡

包皮をめくられて露出した神経の塊に押し付けられて♡♡

……くちゅ♡♡

「ン」 お…♡♡♡

上下に往復したかと思えば♡♡♡

ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅツツ！！♡♡♡♡

ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅツツ！！♡♡♡♡

「お」 ……………ツツ！！♡♡♡♡ おおおおおおっ  
っ！！！！♡♡♡♡」

思いっきり擦られた♡♡♡♡

イったばかりの敏感なそこが発火しそうなくらい熱くなる♡♡♡♡

それと同時に体が言うことを聞かず、野上さんの腕の

中で激しく悶えた♡♡♡♡

ぐちゅちゅちゅッッ！♡♡♡ ぐちゅちゅちゅッッッ  
！！♡♡♡♡

「お” ッッ、んおおおっ！♡♡♡ ま、まって、……あ  
ああ！！♡♡♡♡♡」

腰が逃げようと勝手に前後する♡♡

ぐちゅちゅッッ！！♡♡♡ ぐちゅちゅッッ！！♡♡  
♡ ぐちゅちゅッッ！！♡♡♡

「お” ッおっおッ、お、っっほおお” ！！♡♡♡♡♡」

それでも野上さんに押さえ込まれた体は逃げることは  
できない♡♡♡

ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅッッッ！！  
！♡♡♡♡♡♡

「お” おおおお”、お、お、お、おッ” ッ” ！！♡♡  
♡♡♡♡」

片足を担がれ上半身ごと抱き込まれて♡♡ 無防備な  
クリトリスを思いっきり擦られる♡♡♡♡♡

「中、僕が確かめていいですか？」

「どうぞどうぞ、近くで堪能しましょう」

さっきまで目の前にいた男の子が割り込んできて、ク  
リトリスを擦る男の隣にしゃがみ込んだ♡♡

信じられないことに彼は開いた陰唇になんの抵抗もなく顔を埋め♡

ぢゅっっ、ぢゅるるるっ、ぢゅるるるる……！  
！♡♡♡♡

濡れた割れ目を吸い込むように唇を震わせてきた♡♡  
♡♡♡

「あッ、あああああ！！♡♡♡♡♡」

ゾクゾク、ぞわぞわ、未知の感覚に背中が戦慄く♡♡  
♡♡♡

イってすぐのクリトリスを擦られ、同時に陰唇ごと咥えこまれ、割れ目の愛液を吸い上げられる♡♡♡♡

その上、野上さんは空いた手で私の乳首を揉み込んできた♡♡♡♡

(なにこれ、三人一緒に触ってきて、みんなの前で気持ちよくされて……、もういったのにまた気持ちよくなっちゃってる♡♡♡♡)

ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡

硬いままのクリトリスは押し潰され擦られて♡♡

ぢゅるるるっっ！♡♡♡ ぢゅるるるっっ！♡♡♡ ぢゅるるるっっ！♡♡♡

愛液の溢れ続けるおまんこは余すところなく吸引され♡♡

くりゅ♡♡ こりゅ、こりゅ♡♡♡ ぐりぐりぐりぐり♡♡♡♡

萎えることなく勃起したままの乳首は付け根を刺激するように揉み込まれる♡♡♡♡

ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡

ぢゅるるるっっ！♡♡♡ ぢゅるるるっっ！♡♡♡ ぢゅるるるっっ！♡♡♡

ぐりぐりぐりっ♡♡♡ こり♡♡♡こり♡♡♡こり♡♡♡ きゅううう……！♡♡♡♡

ラグについた片足だけ踏ん張ると、またお腹の奥に力がこもって気持ちいい感覚が大きくなる♡♡♡♡♡

私は野上さんの胸に背中を押し付け、耐えきれずに顎を上げ喉を反らした♡♡♡

「おッ、お”っ、お、……！♡♡ だめ、だめえ♡♡♡  
こんな、またイっちゃうからあ”！！♡♡♡♡♡」

その声にまだ椅子に座っていた他の生徒さんたちもとうとう立ち上がって私を囲んだ♡♡

それでもクロッキー帳と鉛筆を持ったままの人もいて、後ろから横から前から、目をギラつかせた男性たちに囲まれる♡♡♡

……見られてる♡♡ 乳首もクリトリスもおまんこも♡♡ イったのにそれでも気持ちよくされて、またイっちゃうところ♡♡♡♡

ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッ！♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッ！♡♡♡

ぢゅるるるっ！♡♡♡ ぢゅるるるっ！♡♡♡ ぢゅるるるっ！♡♡♡

きゅううう……♡♡♡♡ きゅむッ♡♡♡ きゅむッ♡♡♡ きゅむッ♡♡♡

「みんな見てるよ、イク寸前の夢子さんの一番気持ちいいって顔。すっごくいい顔してる。イキ顔もおまんこも晒して解放されましょうね」

「あ”、ああ……、イク♡♡♡ イクイクイクイクっ♡♡♡♡♡ おほお” ………♡♡ イ” く” ………！！！！♡♡♡♡♡♡」

ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅ  
ッッ！♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡  
ぐぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡

「お” ……………ッッッッ！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

片足がラグを蹴った♡

腰は宙で前後に揺れ、思いっきり開かされた足の間、  
生徒さんがしゃぶりついているおまんこはまた絶頂にパ  
クパクと蠢く♡♡♡♡♡

「うあ……♡♡ ああ、……ッ♡♡♡」

余韻の熱が引いてくれない♡♡

腰がなんだかくすぐったいしクリトリスもおまんこも  
脈打っている♡♡♡

「夢子さんは本当にモデルとして描き甲斐があるなあ。  
最初の戸惑ってた表情からの今の顔…。こういう変化が  
いいんだよ」

言いながら野上さんは生徒を一人手招くと、二人で私

の体を両側から抱き上げた♡♡

膝の裏に腕を通して今度こそ体全部が浮いてしまった♡♡

「もっと新しい自分を見たいよね。夢子さんもそうでしょう？ 僕たちももっと君の顔が崩れるのを見たい」

「……うそ、そんな」

私の前に出てきたのはさっきまでクリトリスを触っていた中年男性だ♡

彼は欲情した顔をしていつの間にか露出したちんぽをじごいている♡♡

そのちんぽは手の中であっという間に膨張し、私のおまんこに向かって反り返った♡♡♡

「ほら、もうおちんぽに釘付けだ。彼のちんぽ、ここに欲しいんだよね」

野上さんが言いながら私のおまんこを左右に開いた♡  
♡

このままではちんぽが入ってきてしまう……♡♡

……私の、新しい顔ってこれだったんだろうか？

何も生み出せない、何の刺激もない生活を送っていた  
私が、

知らない人たちに囲まれ、乳首もクリトリスもおまん  
こも気持ちよくされて、みっともない声をあげていくこ  
とが——、

ずっつぶん♡♡♡♡♡♡♡

「……………お” ツ♡♡♡♡♡♡」

生徒さんの勃起ちんぽが♡♡

折り畳まれた体にまっすぐに入ってきた♡♡♡

それはぐずぐずに濡れた入り口を広げ、斜め上へ進ん  
できて、すぐに奥に当たった♡♡

ぐちゃぐちゃ考えていた思考が全部ちんぽに引っ張ら  
れた♡♡♡♡

「ほ、……お♡♡♡ お、っ♡♡ おお……♡♡♡♡」



まだ触られていなかった奥までしっかりと広げられる



おまんこがおちんぼの形にゆっくりと馴染んでいく♡



「……き、きもちいい…♡♡♡♡♡」

じわあ……♡♡♡

おまんこの奥から全身へ染み渡っていく淡い快感♡♡



私は野上さんと、反対側で私を抱き上げている生徒さんにしがみつきそれを味わった♡♡♡

ずる、……っ♡♡

「おっ、あ”♡♡」

そしておちんぼが引かれ、

ぼちゅんっ♡♡♡

「ッ”♡♡♡」

押し込まれ♡♡

ずるっ♡♡ ぼちゅんっ♡♡

「お♡♡ お♡♡」

ゆっくり抽送を始める♡♡♡♡

ずるっ♡♡ ぼちゅんっ♡♡ ずるっ♡♡ ぼちゅんっ♡



「ほッ♡♡ お♡ お♡ お♡♡」

生徒さんも私の腰を掴みそこへ向かって腰を前後にスイングさせた♡♡♡

ずるっ♡♡ ぼちゅんっ♡♡ ずるっ♡♡ ぼちゅんっ♡♡

「お♡♡ おお♡♡ これ、やば…っ、♡♡♡」

カリ首まで引き、押し上げるみたいに奥にぶつかる♡♡

ずるッ♡♡ ぼちゅんッ♡♡ ずるッ♡♡ ぼちゅんッ♡♡

「お…！♡♡ んおっ、おおおッ！♡♡♡」

それも次第に強くなって♡♡♡

ずるッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ずるッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ずるッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ずるッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡

「おッおッお♡♡♡ おあ♡♡ あああッ♡♡ おまんこ♡♡ いい、これいい、……！♡♡」

「君、本当にいい顔するねえ。おまんこもすごく締めてくるしちんぽ大好きじゃないか…！」

生徒さんの息も上がる♡♡♡♡

私はいつの間にかおちんぽが気持ちいいところに当た

るように背中を丸め腰を突き出していた♡♡♡

しかもそれだけじゃない♡♡

へこおっ♡♡♡

へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこ  
っ♡♡

抱き上げてくれている二人を支えに腰まで前後させた  
♡♡

おちんぽのピストンを手伝うように♡♡♡♡

ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡  
♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡  
♡

へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこ  
っ♡♡

「お”っ♡♡ おお♡♡ ン” おっ♡♡ お”ッ♡♡ これ  
♡♡きもちいい♡♡♡ おちんぽきもちいいよお♡♡  
♡」

ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡  
♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡  
♡

へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこ

っ♡♡

「あ、あ” ～～～～♡♡♡ 腰とまんない♡♡ おまん  
こがもっとおちんぼ欲しいって言っちゃってる……！♡  
♡♡♡」

ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡  
♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡♡ ぼちゅんッ！♡  
♡

へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこっ♡♡ へこ  
っ♡♡

「あ” ———～～～～～～っっっ！！♡♡♡♡♡  
♡♡」

頭の中が気持ちいいことでいっぱいになっていく♡♡  
♡

……そうだ、これだったんだ♡♡

新しい私♡♡♡♡

気持ちいいことに正直になって、自分を追い詰めるた  
めに腰振って♡♡ちんぼ欲しがって♡♡♡♡

「お” おおお♡♡♡♡ イきたい♡♡♡ おちんぼでイ  
きたいです…！♡♡♡♡♡ ふおッ♡♡ おおおッ！！  
♡♡♡♡♡」

「おちんぽだけでいいの？ もっと気持ちよくなれるの  
知ってるでしょ」

野上さんが目配せすると別の生徒さんたちが私のところ  
へ来た♡♡

両側から両乳首を口に含み♡♡横からはクリトリスに  
爪を立てられる♡♡♡♡

「あ……、うそ♡♡ ぜんぶ、………オ” ツツツ、ほお  
おお……！！♡♡♡♡♡」

ぢゅぶるッ！♡♡ ぢゅぷっ、ぢゅうううッ！♡♡  
♡ ぢゅろお♡♡ぢゅろろお♡♡♡ レロレロレロレロレ  
ロレロレロ……♡♡♡♡♡

カリカリカリカリッ！♡♡♡ カリカリカリカリカ  
リカリッ！！♡♡♡

乳首は唾液塗れの口内に包まれ、そのまま吸引され♡  
♡

クリトリスは爪の先で細かくしごかれる♡♡♡♡

「んお” おおお……～～ツツ！！♡♡♡♡ おおおお  
ツツ やば、これやばいい……！！♡♡♡♡♡♡」

「目バッキバキだし腰へコ止まらないし……、気持ちい

いんだね、夢子さん」

「きもち……、です、これえ…！！♡♡♡♡♡ イきそ  
……、イ`く`、………」

ぼちゅんッぼちゅんッぼちゅんッぼちゅんッぼちゅん  
ッぼちゅんッ！！♡♡♡♡

へこッへこッへこッへこッへこッへこッへこッへこッ  
！！♡♡♡♡

レロレロレロレロオ♡♡ ぢゅるるっ、ぢゅぷうッ♡  
♡♡ ぢゅろっぢゅろっぢゅろっ♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリ……ッッッ♡♡♡  
♡

ちんぽを受け止めながらもそれに合わせて腰を振るの  
も忘れない♡♡

そうしているうちに視界に鉛筆を走らせている生徒さ  
んが映った♡♡♡

(見られてる♡♡♡ こんなにみっともなく腰振って♡  
♡ おまんこと乳首とクリ気持ちよくされてるの見られ  
てる……！！♡♡♡♡♡)

ぼちゅんッぼちゅんッぼちゅんッぼちゅんッぼちゅん  
ッぼちゅんッ！！♡♡♡♡

へこッへこッへこッへこッへこッへこッへこッへこッ  
！！♡♡♡♡

ぢゅるるッ♡♡♡ぢゅるるッ♡♡♡ れるれるれるれ  
るッ♡♡ レロレロレロォ♡♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリ……ッッッ♡♡♡  
♡

私のみっともない今の姿と、その真剣な目♡♡  
傍観されている事実が私を余計に煽る♡♡♡♡

(見てて♡♡イクところ♡♡♡♡ イく、イク……！！♡  
♡♡♡♡)

ぼちゅんッぼちゅんッぼちゅんッぼちゅんッぼちゅん  
ッぼちゅんッ！！♡♡♡♡

へこッへこッへこッへこッへこッへこッへこッへこッ  
！！♡♡♡♡

べろべろべろべろべろべろべろべろっ♡♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリ……ッッッ♡♡♡  
♡

「お” ツ♡♡ お” お” お” お” ～～～～～～ッッッ  
ッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

背中を丸め、まるでちんぽを搾りあげるようにおまんこを上向かせていった♡♡♡♡

頭の中、スパークしたみたい、パチパチと瞬いて体がそれに合わせてビクビクと痙攣する♡♡

(気持ちいい……♡♡♡♡ こんな知らない♡♡気持ちいいとこ全部一緒にされるのこんなにいいの、知らない……♡♡♡♡)

ずるり、ちんぽが抜けて足を下ろされた♡

やっと自分の足で体を支えられる、と思ったのに♡♡  
♡♡♡

後ろから腰を掴まれて♡♡

バスッ！！♡♡♡♡

休みなくちんぽを突っ込まれた♡♡

押し出されて爪先立ちになってしまう♡♡♡

更に後ろから腕を掴まれて胸が限界まで反らされた♡



「いいね、この胸の曲線。女性を描くときには意識したいところです」

野上さんがのんきにそう言っている間に、ちんぽはピストンを始めた♡

周りの生徒さんたちも鼻息荒く私を囲んで♡♡♡

私は部屋の真ん中で淫靡な空気に埋もれた……♡♡♡  
♡

バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡

「ほッ♡♡ おッ♡♡ お、お”っ、オ♡♡ んオ”♡♡  
♡」

「まんことろとろ……、えっぐ」

興奮したような若い声が後ろから聞こえて、広範囲の肌と肌がぶつかるように腰が動かされ続けた♡♡♡

前からは他の生徒さんが乳首をこね、濡れて滑るクリトリスを摘み、しごく♡♡♡♡♡

バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡ バスッ！♡♡♡

こりこりこり♡♡♡ ぐりぐりっ♡♡ カリカリカリ♡  
♡ ピンピンピンッ♡♡ピンピンピンッ♡♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ……ッ  
ッ♡♡♡

「ほッッ” おおおお♡♡♡ これ” きもちい”、……♡  
♡♡♡ ぜんぶいっしょされるの♡♡すごい……！♡♡  
♡♡ お” お” ッ♡♡ んおおおおッッ！♡♡♡♡」

■続きは製品版にて♡